ひと夜

晝のうち、よくよくほんの一寸の間、例になくうとうとと靜になった枕許をはなれて、お末は長火鉢の前ににぢり寄った。そこには立て膝の勇吉が、煙管を指にはさんだまゝ、店の方を向いて先刻からぼんやりして居た。

『ね、貴君』

常からもものしくひそめるが癖の聲をやゝ慄はして、

『到底駄目ですばい』と額に手をあてる。

『むゝどうもな……』

勇吉はそれきり何も言はなかった。堪らなく頼りなくなって、お末はさっと眼が痛くなるのを覺えた。娘は死んだ、死んだとは思へぬけれども死んだのだ、といっては諦めかねて泣く、その時の悲しさはさぞと思ふと、想像するその悲しみ歎きが今胸に迫って、つひ涙が溢れた。

勇吉は娘が萬一のことを思ひ至るにつけ、二年前に強い事を言ひ合って家を出た倅のことを思った。その時二十二だった若者は、三つ年上の女房をつれて、假令女郎あがりだからといって家の爲めになるものは、爲めになる、誰が何といはうと氣に入った女は飽く迄も氣に入った、と未練なく家を出て、今は山形地方に流れて藥の行商をやって居ると聞いた。それらが思い現在の心配に絡って、身も世もなく、たゞ娘可憐さの思ひだけが明かに

意識された。

九月半ばの町の祭典が、猖獗を極めた赤痢のために無期延期になって、折角の若者の氣込みが徒になる。學校は授業が半日になる。役場からはそれに就て訓示の刷物が配られる。水泳ぎが禁じられる。白い巡査が時々茶屋茶屋を廻って歩いて、魚の煮付けに群集がる蠅を金網で防がせ、三文店の大皿に曝されて居る水瓜の切り口に八ケ間敷紙を張らせた。

それでも猶日毎に縄張りの家が殖えて、石灰の罐を擔いだ人夫の先に、昇汞水の壜を下げた巡査の姿が、西に行ったり東に行ったり、またかと道行く人に不氣味な思ひをさせた。人は恟々として、息をひそめた町にその日を送った。

お末は好きな道とて、今年も私得仕事に半枚ばかりの秋蠶を掃いた。六疊の疊を剥がして、棚を吊って、桑は僅かばかり持って居る畑に、朝と晩と自分から摘みに出かけた。

或る日もさうして歸って見ると、今年からお針の師匠へ通はして置くお大が、加減が惡るいといって蒲團をかぶって寢て居た。額に手をやって見ると吃驚するほど熱く、その日の午后から幾遍となしに後架に起って、その度に錐で腹を抉られるやうに痛いといって顔をしがめた。夜中にはお末を起して泣いて居た。

もしやと思ふものから、夫婦は青い顔をして額を集めたけれども、つひ脊中合せ程に門を構へて居る頼みつけの醫者すら呼びにやらなかった。それは飽く迄もお末が首を振って強情を張ったからである。小さな躰を年中さもないことにばかり苦勞して居るお末は、口にするのも身慄ひするほど避病院といふものを嫌った。それといふのも、そんなでもない

者にまで下劑をかけて殊更に衰弱させて、碌々食事もあてがはず、遂に命をとってしまふところだと、去年疑似赤痢にかゝって避病院に入れられて、萬一を助かって歸った、無教育な長家ものの言ふことを堅く信じて居るからである。折角十六になった大切な娘を、たとひかうして死んでも殺しにはやらぬと、涙まで溢して強情を張った。勇吉とても同じこと、避病院に對してはそんなくだらぬ考へは持って居なかったけれども、可愛い娘をみすみす手放して情けも容赦もない警吏の手に渡すのにはしのびなかった。

第一勇吉は店を恐れた。五日なり一週間なりの交通遮斷、見得に關はず振撒かれた石灰の白い痕跡が及ぼす影況、そんなことを考へては、氣遣はれぬでもなかったが、お末の言ふに從って醫者を避けた。

越中富山の行商人が、年々無理押しつけに置いてゆく黄色い袋を取り出して、赤玉やら熊の膽やらそんなものを温湯で飲ませて置いた。狹い家のことゝて、見通しに蒲團の見えるのを氣遣って、草箒や筵などのがさつに押し込まれてある二階を少し片づけて、座敷の疊を四枚ばかり据ゑて病人をそこに運んだ。寢てる人があるなどゝは決して人に云ふなと、かたく小僧の口をとめて、夫婦は一心になって神信心をした。

けれども病人は日増しに惡るくなって來た。肉も下るかと思ふほど痛んでは便を催して、うとうとしたかと思ふと辻褄のあはぬ言を口走る。僅か三日目の今日はもう見違へるほど肉が落ちた。お末もごっくり目がくぼんだ。

蠶は三眠にかゝらうとして居た。廿枚ばかりに殖えたのを、お末は手一つにやって居た

が、もう蠶どころの騒ぎではないと、幾度かそれを捨てようと思った。けれどもまた何になく虫の精がよく、待ち切ったやうに桑喰む音の高いのを聞いては、また未練が殘って、斷然流してしまふ程の勇氣も出なかった。

雨に渇へた埃の街に夜が來て、蒸し暑いながら仰げば今宵も天の川は高く流れて居る。積み累ねた笊や笠、さがって居る馬の手綱やら麻やら、せゝこましく品物の精一ぱいにひろげられた店は、軒並に比して洋燈が殊に暗かった。その下に十二ばかりの子僧が、足を斜にして坐って居る。首が時折前後に揺れて、軒近くわざと咳拂ひして通る若者もあった。

主人の空鼻を啜る音に、錢の音がカチカチ交って響いた。店を脊にして小半疊ほどの澁紙を擴げて、勇吉は今日の賣り溜めを調べて居た。十一になった妹娘のお幸は、その前に寢そべってばたばた兩足を泳がせて鉛筆を嘗めては小聲に調子をとりながら、たどらどしく唱歌をうつして居る。

二階からは憚ったやうに灯の影が洩れて居る。お末は一頻り腹を揉んでやって居た手をとめて團扇をとった。……ふと猫の泣く聲が耳にはいる。何處かで猫が泣いて居る……と何時からか識のぐるりを迷って居た感覺が、いつともなしに中點に這入って來て、今はなんとなくそれが氣にかゝる。暫く耳をすまして見た。みしり、と一つ二階に足音がした。

『玉ではないか、お幸――』

梯子の入口にお末の小さな黒い影が立った。それとお幸も今し方氣づいた念を猶確かめ

るやうに、起きかへって耳をたてゝ居たが、黙ってふいと裏へ出て行った。

『開(あ)けてやれ、倉だから確に』

こともなげに重々しい口で勇吉は云った。さうしてそんなことよりも何か更に重大なことを考へなければならぬやうな氣がして口を堅くした。

倉ではない、と聲の方角で判じながらも、猶念のためにお幸は倉の戸をあけてみた。暫く闇に目を据えてみる。常ならば白い塊りがつと飛び出して一目散に驅け出して、戸口で待ち合して足に搦みつくのが例である。容子が少し變だと思ふ。なき聲が確に常と違ふ。

杜絶(とだ)えたかと思ふと一頻り烈しくなき出して、憐れみを乞ふやうな、救ひを求めるやうな、それが續いては努力に焦慮(あせ)る醜い聲となって、たとひ可愛い我猫でなかったにしろ、お幸の單純な心は動かされずには居なかった。常から怖ろしがって居る井戸端の暗さも忘れて、其処此處(そこここ)と歩いてはチョッチョッと呼んで見た。

建てつけの惡い隣家(となり)の水口があいて話し聲が洩れる。

『何處(どこ)の猫だ――』

『やかましい畜生(ちくしょう)だなァ、裏の倉に閉めこまれたんでねぇか』

『啓介、鍵を持って來て見ろ、倉……とも少し違ふやうだげっとな』

『隣の玉かも知れないよ』

境の溝(どぶ)を越してお幸はそれに近づいた。

『お幸ちゃんかい？』

小母さんの聲がして、三つの黒い顔が一様に此方を透して見た。
『あんた家の猫でねえかい――』
『えゝ、さうかも知れないの』
『どうも此方らしい……』
提灯を持った一人は、ふらりふらりと聲の方へと翳して行った。
『井戸だな――』
呟いてすたすた井戸端に寄った。井桁に手をかけて丸い灯を中に下す。
『居た居た、おい居たぞ！』
『居た？』
急いで皆集まった。
『やあ畜生なんだって落っこちやがったんだ』
『成る程ぎやあぎやあなく筈だァ畜生一生懸命だもんな、縁に獅噛みついてるんだぜ必と』
『おやおやまァ可哀さうに――』
朦朧とした丸い灯は、底深な井戸の中に揺られて、遥かに黒い水の動くところ、岸にあたってほの白い物體が見える。
『玉だ！　玉だ玉だ』
確かめて今更お幸の胸は動悸を打つ。
『あげて、啓さん早くあげとくれ！』

『あげてって、どうしたらよかっぺなこいつあ、此釣瓶(つるべ)にかゝんねかなァ――』

『啓さん笊(ざる)はどうだい？　笊(ざる)を細引でつるしてさ』

人聲が耳にはいった故(せい)か、猫は一際強く鳴き出した。

『待ってろ、今あげてくれっから――そうら畜生いゝか』

笊(ざる)は細引でつるされてさがって行った。

『なんだなんだ、駄目かなァ、駄目だいこらァ、畜生乗っかるっつう智慧がねぇからな』

『困ったね――』

『己家(おらつち)の玉ですけぇ？』

お末も襷(たすき)がけのまゝ寄って來た。

『おっ母(か)さ、見なんしょあれ玉が、玉があれあんなに……』

お幸はお末の袂(たもと)をぎっしり握って引き寄せる。

『どうした途端(はづみ)で落っこちたもんだか……よいお晩、なんて蒸し暑い晩ですことねぇ』

『よいお晩でござりやす。とんだお騒がせ申しやすねぇ……まあなんだって馬鹿な猫だこと』

『可哀いさうに、おっ母(か)さ』

お幸はひとりではらはらして居る。鳴き聲もだんだん弱って來たやうな氣がする。

『水は飲んでないやうですげっともね――』

多くの首は更に井戸を覗き込む。

『仕方がない、丑さでも頼んで來て中にはいって貰ひやすべ。啓さんあんた……四郎さんでもいゝ、直ぐ其處の丑さ家へ行って頼んで來てくんないかい……ね、ご苦労様でも』

晩酌をひっかけて居た仕事師の丑さんが、やうやうのことでやって來た頃は、もうすっかり聲が絶えて居た。丑さんは苦もなく釣瓶に傳はって、がらがらと下りて行った。

『……大丈夫だ大丈夫だ、水はちっとも呑みやしねえ、石の間に首をつっこんでやがる。よしか、おいそら！　あげてやすよ』

『あっと、あ！　よしよし』

細引は手繰られた。

『どれどれ』

一頻りまた爭って笊の中を覗き込む。

『死んでるな！』

『いやまだ生きてる、腰ばかり濡れてらァ』

お幸は矢庭にぐたりとしてゐる小猫を袂に包んで家に驅け込んだ。

『おっ母さ、おっ母さ』

後に殘って隣へ挨拶をして居るお末を待ち兼ねて、お幸は板の間に立ってうろうろして居た。

『どうした死んでるか……お湯でゞあっためて見っか……どれ』

『たァま、たまたま』

『可哀そうに……』

二人は臺所の暗がりでバケツや鐵瓶(てつびん)の蓋(ふた)の音をたてゝ猫の介抱をした。

『お末！　何してるんだ、早く來ないか』

二階から勇吉が呼ぶ。それには猫どころの騒ぎではないぞ、といふ氣が充分に讀まれた。

『はい』

お末もそれは承知しきって居る、けれども先刻(せんこく)ふと、娘の病氣のことゝ、猫のふとした災難を繋ぎ合して考へてから、どうしても其聯絡(れんらく)を斷って考へることは出來なかった。其間に何等かの暗示があって、猫が死ねば娘も死ぬ、といふやうないやないやな考へが、拂っても拂っても力強く胸を占めた。で小半時間かゝって様々に手をつくした結果(あげく)、やうやう枯れた聲をたてゝ鳴き出したのを聞いた時は、お幸にも増して喜んで胸をさすった。

猫は屑綿で包まれて、お幸の膝に時々四肢をぴくぴくさせて居る。呼吸(いき)はまだ荒く細く不規則である。

程過ぎて二階からみしみし降りて來た勇吉は、提灯をつけて黙って裏へ出て行った。

『お幸、お幸』

お幸は何故かびくりとした。そっと膝の上のものを下して、下駄をつッかけて恐る恐る出て行った。

『なァに？』

遠くから聲をかけて、足さぐりに近づくと、勇吉は倉の脇にすっきり立って居た。

『これ持って居な』

と提灯を手に渡す。左の手に鍬を下げて居る。

『何しんの？』

けれども勇吉は黙って居た。力を入れて一下し鍬を下すと、カチリと石に觸れて齒の浮きるやうな音をたてる。瓦の缺片や瀬戸物の缺片が、掘りかへされて割られて、二つに切られた蚯蚓が、身に波を打たして這ひ廻った。

殆ど六七寸掘り下げた。

野中に金を埋めたといふ、昔話の泥棒のことを思ひ出して、地を掘るといふことが、お幸には少なからず恐ろしく思はれた。聞くのも恐ろしいやうな氣がして、不安な眼を凝乎と凝らして居ると、勇吉はやがて足許に置いたお大が便器のものを、その穴にあけた。お幸はそれを何の譯とも解することが出來なかった。

傳染の恐怖、生命の危憂、隱蔽の不安、勇吉は矢鱈にビール壜の石炭酸水をふり撒いて、急いで土をもとにかへした。

『貴夫、貴夫！』

突然氣魂しくお末の呼ぶ聲、父子ははっとして起ちあがった。

底本：「水野仙子全集」第二巻

初出：「趣味」明治四十二(1909)年八月號
テキスト入力：小林　徹
公開：令和三年三月十五日
リンク：水野仙子ホームページ